公認会計士「研修出向制度」体験者リポート

vol.20　取材・文／南山武志　撮影／大平晋也

新日本有限責任監査法人が2010年にスタートさせた、一般事業会社への会計士「研修出向制度」。本制度を活用し、自己成長に励む公認会計士たちのリアル・リポートをお届けする。

税務を極めたく、出向を希望

——大学卒業後、ハウスメーカーに勤務されたんですね。

小岩井　はい。子供の頃からの夢だった設計の仕事を10年やりました。

——なぜ畑違いの会計士に？

小岩井　サラリーマンになって、それなりに社会のことがわかってきたら、会社とはどういうものなのか、経済はどう動いているのか、といったことに、興味が湧いてきたのです。そんな時、新聞で公認会計士の試験制度が大きく変わり、社会人経験のある人材も積極的に受け入れるようになるという記事を読んで、直感的に「これだ！」と。会社を辞めて試験勉強を始めたのは、31歳の時でした。

——監査の仕事は、どうでしたか？

小岩井　監査法人に来てまず感じたのは、一般企業に比べて〝縛り〟が少ないことです。一人ひとりが資格を持ったプロで、どこまでやるかもその人次第、という雰囲気はとても新鮮でした。

監査ではメーカーや商社など幅広い業種の会社を担当しましたが、直接経営者の話をお聞きし、現場にも出て、会社というのはこうやって利益を挙げていくものなのだということを実感できました。技術職ではできない、いい経験だったと思います。

税務の知見とノウハウをさらに深めながら、可能性を広げていきたい

東日本電信電話株式会社　財務部　税務・資金部門

小岩井無我●43歳

——一般企業への出向に、手を挙げた理由を教えてください。

小岩井　社内公募でこの制度があることを知り、事業会社に身を置きながら、また新たな経験を積めることに魅力を感じました。監査の現場を離れることに不安がなかったといえば嘘になりますけど、興味を覚えると、迷いを吹っ切って進む性質なので（笑）。

もう一つ、僕の中に「会計はやったから、次は税務を経験してみたい」という気持ちがあったのですが、たまたまこの会社の希望が税務部門への人員補充だったんですよ。会計士を採るなら、普通は会計分野の仕事でしょうから、これも何かの縁だろう、と出向させていただくことにしました。

——NTT東日本に出向後、どのような印象を持ちましたか？

小岩井　企業である以上、利益を追求するのは当たり前でしょう。でも、この会社の場合はそれだけではなく、社員がみんな「日本の通信インフラを支えているんだ」という強い責任感を持って仕事をしていることをひしひしと感じるのです。その点は、素直にすごいなと思いました。財務も、絶対に間違いを起こさないという意識が強くて、一つひとつみんなで納得しながら進めていく、という仕事のスタイルが徹底されています。

〝違った視点〟を生かし成果を残したい

——所属部署の体制、仕事の中身について聞かせてください。

小岩井　私の所属する税務・資金部門は、総勢15名ほどの陣容で、うち税務の担当者は4名います。税務調査対応や、社内からの税務相談への対応、決算の税金パートの処理などのほか、グループ会社の税務部門との意見交換も大事な仕事です。

——そもそも、なぜ税務がやりたかったのでしょう？　実際に携わってみた感想は？

小岩井　監査でも税務に触れますけれども、それはごく一部で、全体像がいまひとつイメージできなかったんですね。そこを一般企業で実際に担当することで、深めてみたかったのです。会計は、仮に監査などを通じてやり取りして数字を変えたとしても、それに伴ってお金が動くことはありません。でも、税務は違う。例えば、新たな税法をよく理解して適用することによって、納税額を大幅に減らしたり、その逆になったり。言葉は変ですが、そんなダイナミックさを体感することができたのは、やはり僕にとって大きな財産になったと感じています。

——そうした事業会社での経験は、監査に役立つと思いますか？

小岩井　監査をしている時にも、果たしてクライアントに自分の考えが通じているのか、こちらの言うことに満足してくれているのだろうか、という思いは常にありました。〝監査される側〟の理論や内実を知れば、より噛み合った、質の高い監査ができるようになるのは、間違いないと思います。

——3年の出向期間もちょうど折り返し点ですが、今後の目標を。

小岩井　NTT東日本という会社は、中途入社があまり多くありません。私のような存在は、全体から見れば〝異質〟です。そうである以上、あえてプロパーの社員とは違った視点から物事を考え、発信していくのが一つの役割かな、と感じています。1年目は、新税制への対応などで一定の成果が残せたと感じていますが、「わざわざ会計士を採用した意味があった」と言われるような足跡を残せるよう、残りの期間、全力を尽くしたいと思っています。

——若い会計士に向けたメッセージを。

小岩井　当然のことながら、監査法人にいなくては積めない経験は、たくさんあります。また、3年間の出向によって失うものもあるでしょう。一方、お話ししてきたように、外に出てみたからこそ見えてくるものも数多くあります。例えば、この制度を使って出向するかしないかは、そこも含めて判断すればいいでしょう。ただし、出るからには、その経験を必ず次の仕事に生かしていくんだ、という気概を持ってチャレンジすべきではないでしょうか。

Muga Koiwai
Profile

1972年1月25日	東京都福生市生まれ
1995年3月	国士舘大学工学部 建築学科卒業
4月	株式会社木下工務店入社
2006年12月	みすず監査法人入所
2007年8月	新日本有限責任監査法人入所
11月	公認会計士試験合格
2010年7月	公認会計士登録
2013年7月	東日本電信電話株式会社へ出向

家族構成＝妻、娘2人

出向受け入れ企業の声

組織にうまく溶け込み、向上心も高い。残りの期間をさらに充実させてほしい

東日本電信電話株式会社
財務部 税務・資金部門長
大友 啓

小岩井さんには、2013年7月に日本CFO協会の「出向制度」により当社へ来ていただき、税務の仕事をお願いしている。税務業務は彼の専門ではなかったが、豊富な会計知識を背景に社内の税務相談への適切なアドバイスのみならず、新税制の適用に向けた検討においても、持ち前のコミュニケーション能力を生かし、期待以上の活躍をしてくれている。

また、会計知識を備えたプロフェッショナル人材を迎え入れたことにより、議論の質が高まり、ほかの社員によい刺激を与え、全体のレベルアップにつながっている。

3年間という出向期間の半分が過ぎたが、残りの期間で、事業会社の業務プロセスをしっかりと身につけてもらい、その後の監査の現場で生かしていただければ、お互いにとって非常によい制度だったといえると思う。